

環境クリーン、にんじんピカピカ マリーゴールドでひろがる「ななえの夢」

変わらぬ野菜づくりの情熱

8年前『石灰窒素使用体験記』に応募され、見事に優秀賞に輝いた坂本雄一氏は、3月中旬、まだ寒風が吹きしきるなかで、早出しにんじんトンネル栽培の準備を始めていた。優秀賞6名のなかではもっとも若い26歳の好青年であったが、34歳になった現在も野菜づくりにかける情熱はますます強いとお見受けした。

この8年間に、坂本氏の経営がどのように変化したのか。そしてマリーゴールドによるネグサレセンチュウの防除法がその後どう展開しているのか。今回の取材はこの点に注目した。結論をいうと、ほとんど当時と変わらない状況であり安心した。

■品種は「アフリカントール」

坂本氏は現在、にんじん(1.5ha)、だいこん(0.5ha)、長ねぎ(0.5ha)を栽培している。

にんじんを3月に播種し、6月下旬～7月下旬に収穫する。マリーゴールドのなかの「アフリカントール」という品種を6月下旬から播種し、苗づくりをして25日～30日で15cmぐらいになったら畑に移植する。

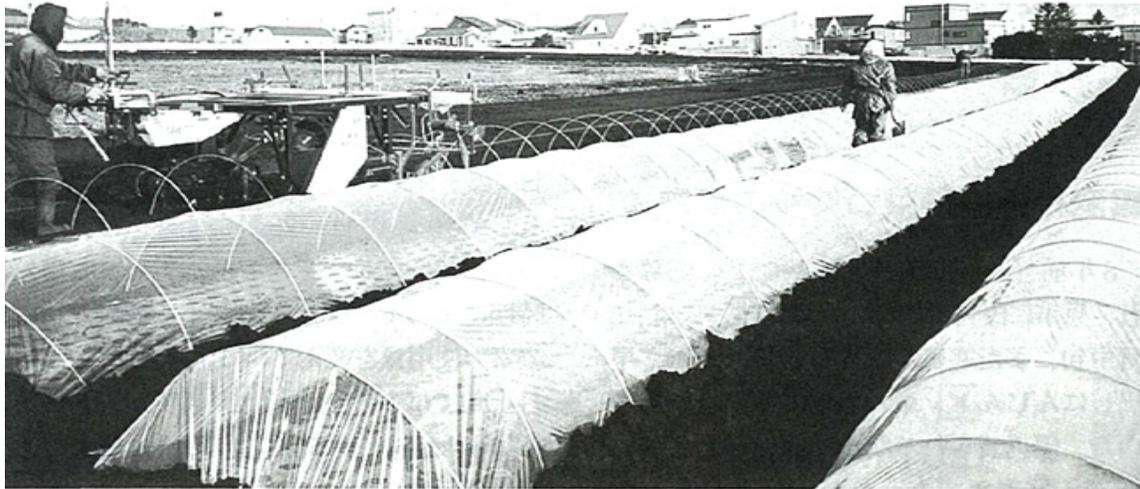
移植の方法は坂本氏は手植でおこなっている。栽植密度は6600株/10a。移植後90日で3～4t、100日で4.5tの収量になる。そして10月10日～25日にすき込む。マリーゴールドの効果をあげるために、収穫の時期によって、腐熟を促進する目的で石灰窒素の使用量を変えている。高温時の8～9月上旬では100kg、低温時の10月15日ごろは60kg、そして11月以降には最大でも40kgが基準になっている。

■激減したセンチュウの被害

10年ほど前、にんじんに「しみ」がついて売り物にならなかった時期があったが、その原因はキタネグサレセンチュウであった。その対策として坂本氏が所属している「七飯町4Hクラブ」が、支並充植物マリーゴールドをとりあげ、農薬を使用しない防除体系の確立をめざした。農業試験場、農業改良普及センター、JAの技術指導を得ながら研究を進めた結果、マリーゴールドの数品種のなかから、防除効果の高かった「アフリカントール」をすき込む方法をとることになった。

この方法によりセンチュウの被害が激減し、にんじんに色がピカピカで肌、艶がよくなった。その効果は3年間はずつづが、現在は2年おきにおこなっている。このように、石灰窒素はマリーゴールドの腐熟促進、土壤消毒や除草にも効果がある。

★早出しにんじんトンネル栽培の準備



クリーン農業をリードする

坂本氏の『石灰窒素使用体験記』優秀賞の表彰式には、8年前、当時の七飯町の町長をはじめ、この技術の開発に関わったJA、農業試験場、農業改良普及センター、「七飯町4Hクラブ」のかたがたが出席された。この七飯町の取り組みは環境保全型の農業技術として全国的に報道された。その当時JA七飯町農協生産部で4Hクラブの指導員をつとめておられた中川富雄氏は、現在もJA新はこだて七飯支店購買部生産資材課の係長として、マリーゴールドによるクリーン農業のリーダーとして活躍している。

七飯町は渡島半島の南部に位置し、函館市から16kmの距離にあって北に秀峰駒ヶ岳を眺望し、気候は温暖で積雪量も少なく、風土と自然条件に恵まれた町である。七飯町では、自立経営農家の育成を図って米、野菜、果樹、畜産を重点とし、国営農地開発事業による規模拡大、転作田の有効利用、有畜農家との連携による有機物投入、生産性と品質の向上、機械の共同利用などを推進している。

にんじんの面積が50%増

農家戸数は656戸で10年前にくらべて13%減ったが、耕地面積は3100haで5%減に留まっている。野菜はにんじん、だいこん、ほうれんそう、ねぎを重点品目としており、なかでも、にんじんの栽培面積は240haと10年前にくらべて50%増えている。

マリーゴールドの普及状況は、平成2年0.4ha(2戸)の試験栽培から始まり、七飯町野菜生産出荷組合や4Hクラブ員を中心に栽培面積が徐々に増え、平成14年には64.2ha(102戸)までになっている。

そのほかの緑肥作物としてハイオーツをクリーン620ha導入するなどクリーン農業に徹した技術を推進し、平成7年には『七飯町クリーン農業広報活動推進委員会』を設置した。その構成メンバーは、行政機関、消費者団体、流通団体、報道機関などである。

マークとスローガンを公募

クリーン農業 ななえは野菜の夢産地



北の大地の安心ラベル

こうした町ぐるみの活動を現地圃場視察や新聞社、TVによってPRを図っている。さらに、スローガンとシンボルマークを全国公募した。採用されたスローガンは「クリーン農業ななえは野菜の夢産地」。シンボルマークは七飯町の『七』の字をモチーフに、頭に「野菜の葉」と「帽子」をかぶった生産者を組み合わせたもの。みどりの大地から安全でクリーンな野菜がスクスクと育つイメージを表現したとのこと。中川氏の名刺にもこのスローガンとシンボルマークと北海道の「クリーン農業」の認定である『イエス！クリーン』のラベルマークが印刷されていた。

函館市のベッドタウンという環境のなかで、マリーゴールドを通じて環境に調和した農業が地域住民に浸透した。そしてクリーン農業のスローガン・シンボルマークの全国公募により、北海道はもとより全国各地の反響も大きく、全国的に七飯の野菜が認識されてきている。

消費者と流通業界との交流

中川氏は「この事業は、個人ではなく組織一丸となって取り組んだのが最大の利点です。地域が活性化し、農業への理解が促進したのです。今後はシンボルマーク・スローガンをどのように消費者にアピールしていくか、流通業界や消費者との交流をどのように図っていくか、マリーゴールド栽培圃場から出荷される生産物をどのように差別化商品として販売するか、などの課題をクリアしていきたい」と抱負を語っていただいた。石灰窒素の使用量も年々増えている。今年度は90tを超えそうだという。

『環境保全型農業』に石灰窒素が貢献している「七飯町」の農業がますます発展することを祈りつつ、残雪の北海道を後にした。

【日本石灰窒素工業会・平沢陽一】